

**<キリスト教思想研究入門>****A. 目的****B. 内容**

0. オリエンテーション → 講義のねらい、内容と方法	4/13
1. 宗教改革とガリレオ裁判	20
2. 啓蒙主義と理神論	5/11
3. ニュートン主義の自然神学	5/18
4. シュライアマハー神学の意義	5/25
5. 宗教批判の諸類型（フォイエルバッハ、マルクス、フロイト）	6/1
6. キルケゴールと 20 世紀神学	6/8
7. 弁証法神学とは何だったのか	6/15
8. ポスト近代とキリスト教思想	6/22
9. 環境倫理とキリスト教	6/29
10. 生命倫理とキリスト教	7/6

4月27日：休講

**C. 成績**

以上の講義に関連したテーマで、まとまったレポートを作成し、7月中に提出。

**1. 宗教改革とガリレオ裁判****(1) 宗教改革**

## 1. プロテスタントとは何か

宗教改革はプロテスタント教会の歴史的出発点であるが、宗教学的に考えた場合、「プロテスタント」に関しては、次の三つの意味を区別することができる。

- ・原理としてのプロテスタント（宗教史の構成要素）
- ・歴史的プロテスタント（教派・組織として）
- ・プロテスタント時代（プロテスタント教会の存在によって構造が規定された時代）

## 2. 宗教改革（ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら）とその広がり

1517年10月31日、マルティン・ルターは、当時ザクセンで大々的に売り出されていた贖宥状（いわゆる免罪符）に対して、ヴィッテンベルク城教会の扉に「95箇条の提題」を貼りだし、贖宥についての学問的討論を提起した。それは、カトリック教会の破門決定にもかかわらず、最初の意図を越えてヨーロッパ各地に広がっていった（思いがけない波及効果）。→ 中世後期の歴史的文脈

## 3. 宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」(信仰義認論)、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に連関し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない。

4. 人間は何によって救われるのか？

- ・行為義認

Q：行為義認と因果応報説の関係を論じよ。

- ・ルターの信仰義認論

パウロ、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。

cf. 法然や親鸞の思想と比較せよ。

- ・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論(罪や恩寵の精神性・内面性)への転換といえる。信じる心の純粹さという個人の人格性が問われることになる。

Q：以上の転換は、錬金術から化学・心理学への移行と、どのように関係づけられるだろうか。

ブライアン・イーズリー『魔女狩り 対 新哲学——自然と女性上の転換をめぐる』平凡社。

5. 理念と現実の緊張 → 歴史の多様な文脈における宗教改革研究

Q：農民戦争に対するルターの対応を、この観点から論じよ。

木塚隆志『トーマス・ミュンツァーと黙示録的終末観』未来社。

6. たとえば、「聖書のみ」(聖書主義)の理念が歴史的な現実となるには、数百年の時間が必要であった。

聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立／初等教育の普及(識字率)

ヒューマニズム・寛容のネットワーク

ハンス・R・グッギスベルク『セバスティアン・カステリョ——宗教寛容のためのたたかい』新教出版社。

7. 市民社会の宗教としてのプロテスタントイズム

聖書の近代語への翻訳 → 西欧国民文化の基礎

『翻訳』(現代哲学の冒険)岩波書店、1990年。

8. 近代的な自律性や人格性(人権)といった理念の成立基盤

宗教改革の精神 → 自立した個人と自由・平等(理念)

西欧的な政治と経済のシステム

近代議会制民主主義(リンゼイ・テーゼ)

近代資本主義・市場経済(ウェーバー・テーゼ)

近代科学(マートン・テーゼ)

9. 近代的な世俗性への二面的な関わり

18世紀以降の動向は次のようにまとめられる。

- ・近代性への適合 → 世俗主義の台頭と譲歩  
合理的な宗教思想（理神論やユニテリアン）
- ・近代的世俗性に対する批判運動（敬虔主義、メソジスト、ペンテコステ運動、さらにファンダメンタリズム）

野呂芳男『ジョン・ウェスレー』松鶴亭（出版部）。

## （２）ガリレオ裁判とは何か

10. ガリレオ裁判を「宗教と科学との関係史」の観点から見る。

宗教と科学の対立図式は19世紀（1880年代）の産物である。

11. 典型的な誤解：バートランド・ラッセルは『西洋哲学史』で次のように主張している。「同様にカルヴァンは、『世界は固く据えられ、決して揺らぐことはない』（詩編93編第一節）というテキストによって、コペルニクスを論破し、次のように声を大にして非難した。『誰が聖霊の権威の上にコペルニクスの権威を敢えて置こうとするのか』と。」（Bertrand Russell, *History of Western Philosophy*, Unwin Paperbacks 1980(1946)。本文の引用は、時間の関係上、原書の515頁から引用者の私訳で行ったが、邦訳としては、市井三郎訳『西洋哲学史』（みすず書房）が参照できる）。

つまり、ここに見られるのは、宗教改革と近代科学、さらに一般化すれば、キリスト教と科学は歴史的に対立してきた、というやや通俗的とも言える見解であり、ガリレオ裁判はその典型例としてこれまで挙げられてきた。

12. 最近のガリレオ研究（芦名定道『宗教学のエッセンス』北樹出版、176-177頁）によって、以上の単純な対立図式の事例としてのガリレオ事件という見方は大きく修正されてきている。そもそもガリレオ自身、キリスト教徒（カトリック）としての自分の信仰と地動説とが対立すると考えていたとは思にくい。対立は、教会的権威と個人の信仰との間に存在するのであって、キリスト教と科学との間に存在するわけではない。

13. 以上の点は、ラッセルが引き合いに出しているカルヴァンにおいて確認できる（とくに、マクグラス『科学と宗教』教文館、を参照）。カルヴァンの『創世記注解』において展開される「適応の原理」（神は受け手の水準に合わせて知識を伝達する。科学者には自然現象についての数学的に定式化された法則を通して、他の人々には、聖書の物語的語りにおいて。この二つの伝達方法は異なるが、内容的に両者の間に矛盾はない）は、宗教と科学の対立という事態を回避可能にするものであって、実際、カルヴィニズムの伝統からは、近代の自然科学の担い手が現れた。なお、この「適応の原理」は、カルヴァンの発明ではなく、古代のキリスト教思想に遡り、また近代思想にも継承されている。

14. カルヴァン：「適応の原理」（principle of accommodation）

カルヴァン『創世記注解』

「モーセは、常識ある普通人の誰しものが教えられなくても理解できるような事柄を平易な文体で記述した。しかし天文学者は、人間精神の賢明さが理解できる限りの事柄を苦勞して探求する。しかしながら、この研究は神に見捨てられるべきものではなく、また、この科学を、自分の知らない事柄は何でも勝手に退けようとする血迷った人々がいるという理由で非難すべきではない。なぜならば、天文学は、喜びを与えるだけでなく、その知識は有用だからである。この学問が神の驚くべき知恵を示すというこ

とは否定できない。……モーセは、学識ある人々のみならず、無学で無教養な人々をも教える教師として定められているのであるから、こういうきめの粗い教え方をするところまで身を低めなければその役割を果たすことができなかつたのである。」

(John Calvin, *Commentaries on the First Book of Moses called Genesis* (translated by the Rev. John King, M.A.) volume First, The Edinburgh Printing Company 1847, p.86)

15. 「適応の原理」の思想的意義

神と人間の基本的関係性、神認識の可能根拠、世界創造・救済の根拠

川中子義勝『ハーマンの思想と生涯——十字架の愛言者[Philologus crucis]』  
教文館。

16. では、どうしてガリレオ裁判は避けられなかつたのか。カトリック教会はなぜ天動説に固執したのか。

<参考文献など>

1. ルター 『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。

『ルターのテーブルトーク』三交社。

2. 金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書。

『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。

『ルターとその時代』玉川大学出版部。

『近代人の宿命とキリスト教—世俗化の人間学的考察』聖学院大学出版会。

『ルターの人間学』創文社。

金子晴勇・江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社。

3. A. E. マクグラス『宗教改革の思想』教文館。

『科学と宗教』教文館。

4. 芦名定道「P.ティリッヒとプロテスタンティズム論の問題」『日本の神学』第25号

1985年 日本基督教学会。

「キリスト教」「プロテスタント」、大貫隆他編『岩波 キリスト教辞典』(岩波書店)、305-306頁。

『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房。

5. 芦名定道「カルヴァン生誕 500年 渡辺信夫『カルヴァンの『キリスト教綱要』を読む』新教出版社」(<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub14h1.pdf>)

6. 伊東俊太郎『ガリレオ』講談社。

7. Hans J. Hillerbrand, editor in chief, *The Oxford encyclopedia of the Reformation*. Vol.1-4.